

No.167

2012.
1.20

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

親しまれる資料館づくり

揖斐川歴史民俗資料館 館長 高橋 宏之



平成17年1月、揖斐川町と近隣の谷汲、久瀬、藤橋、坂内、春日の5村が合併して新揖斐川町が誕生しました。西は滋賀県に、北は福井県に接し、その面積は804km²、町民の生活地も山間部と平野部に広がっています。

さて、合併前の1町5村にはそれぞれに民俗資料館があり、たくさんの資料が保存されてきました。そこで、合併を機に今後の民俗資料の保存と活用を図る観点から、その全容を把握するための作業が行われました。

作業は各館毎に地域の人たちの協力を得ながら、民具や衣料、文書類など現物を1点1点確認することから始まりました。

各館の資料をみて感じたことは、同じ町内でもその地区の地勢・気候等を反映した民具や経済を支えた伝統産業を語るもの、入念な手作りの道具など今日では得難い資料が多いということでした。この他、揖斐川町には昭和62年3月、国の指定を受けた「徳山の山村生産用具」(5890点)があります。

当館ではこうしたたくさんの貴重な資料を背景に年数回の企画展と年1回の特別企画展を2つの展示室で実施しています。企画展では恒例ともなっている正月やひな祭、端午の節句等の展示もありますが、時の話題や四季に因んだ新企画も提示し、常に館に関心を持っていただけるように努めています。

また、特別企画展では町域が広がったことで取り上げる内容も多くなり、最近5年間に実施(一部は今年2月から)のテーマとその概要(カッコ内)は次の通りです。

◇町域全体を対象としたもの

「目でみる学校の歩み」(寺子屋から明治、大正、昭和を経て現在に至るまでの学校の歩みを写真や図面、教材教具でたどる)

「ふるさとの民具と日本の養」(各館収蔵の民具の内から農業に関するものを中心に山間部と平野部の民具の比較展示、特異な民具、併せて全国の特徴的な養35点を展示)

「揖斐川の流れと産業遺産」(揖斐川の舟運と道路交通、橋、ダム・発電所等の建設の歴史を文書や図面、写真で示す)(今年2月から)

◇地区特有のものであるが、町を代表するものとして

「ふるさと徳山—土器が語る徳山の歴史・写真にみるふるさと徳山」(ダムの建設に伴って発掘された土器と在りし日の集落や暮らしの写真で徳山を語る)

「揖斐の町と揖斐祭り」(地域の政治経済の中心として栄えた町の歴史と最大の行事揖斐祭を古図や写真、祭の道具等でたどる)

◇郷土の歴史上の人物を対象としたもの

「わたしの櫻州」(揖斐川町出身で明治末から昭和初期にかけて活躍した画家野原櫻州の作品展。展示品は個人蔵の物を中心とし、所蔵者との共催の形で実施。来館者にこの画家や作品に対するわたしの想いを持ち寄り、交流していただく企画)

以上は最近の企画展示に関する活動の一端ですが、小中学生の昔の生活体験や郷土学習等の支援、古文書解読講座・伝統音楽会の開催等々、広く住民の方々や町内外の関係機関のご協力を得つつ、多彩な活動を展開し、さらに多くの人々に親近感をもって利用される資料館づくりに館員一同心がけています。

第59回全国博物館大会に参加して

期 日：平成23年10月20日・21日
会 場：石川県文教会館

第59回全国博物館大会が、石川県金沢市の石川県文教会館で開催され、全国から約350名が参加し、二日間にわたり熱心な議論がされました。



今年は、大会テーマを「地域と博物館」とし、記念講演では、嶋崎丞石川県立美術館長が、「加賀藩前田家と博物館」と題し、歴代藩主がいかに茶の湯や美術工芸、学術に深い関心を寄せていたか、そしてその精神が今日の金沢の博物館に受け継がれているかについて講演されました。

また、全体シンポジウムは、「地域社会における博物館の役割」をテーマに、南俊英石川県立美術館学芸主幹、秋元雄史金沢21世紀美術館館長、田原直樹兵庫県立人と自然の博物館次長、森田稔九州国立博物館副館長をパネリストに、それぞれの館の地域との関わりを踏まえつつ博物館が地域社会で果たすべき役割について議論がされました。そのなかで、博物館がまちづくりのプラットフォームとなることが望まれるという指摘が印象に残りました。

二日目は、「博物館と地域の活性化」、「学校教育等と博物館」、「小規模博物館の運営」の三分科会が開催され、私は、「学校教育等と博物館」に参加しました。ここでは、谷口出石川県立美術館学芸主幹、大場博典七尾市立七尾東部中学校教諭、不動美里金沢21世紀美術館学芸課長、大野晴代川越市立博物館指導主事から、

活動報告がされました。

石川県では、美術館、博物館が共同で春休みに学校訪問し利用のお願いをしていること、金沢市では、年間500万円を予算化し市内全小学校の4年生が21世紀美術館を訪問していることが紹介されました。また、大場氏からは教師の立場から、大野氏からは博物館の立場から、博学連携について具体的に興味深い報告がされました。

学習指導要領が改訂され、学校教育の中で博物館がより重要な役割を果たすことが求められています。このためか、この分科会への参加者は多く、フロアからも熱心に質問がされました。

そのほかのプログラムとして、文部科学省、文化庁からの行政報告、全国博物館会議等が行われ、東日本大震災への対応状況等が報告されました。

最後に、東日本大震災で被害を受けた博物館に対し、協力・支援を今後とも全力を挙げて継続するとともに各博物館もより一層の安全対策の推進に努めること等の大会決議を採択し閉会しました。

金沢市は、金沢21世紀美術館などの大規模施設から、金箔工芸館、能楽美術館などの小規模施設まで様々な博物館が街の中に点在しています。また、茶屋街や武家屋敷跡などが街を印象深くしています。

そして、街中を縫うように周遊バスやコミュニティバスが十数分間隔で走っています。運転手に女性ドライバーを起用し、施設所在地を丁寧に案内するなど来訪者へのもてなしの心が随所に感じられます。

まさに、博物館が街づくりにうまく溶け込み、金沢のイメージアップに繋がるとともに、それが観光にも大いに貢献していることが実感でき、「地域と博物館」のあり方を考えるにふさわしい開催地での大会でした。

(岐阜県博物館 館長 河合正明)

第129回岐阜県博物館協会 公開講座 「インカ・マヤ文明探訪紀行」

期 日：平成23年8月7日
会 場：光記念館
参加人数 約50名

第129回公開講座が8月7日に光記念館で開催されました。現在、光記念館では「マチュ・ピチュ遺跡発見100周年記念 謎の文明 インカ・マヤ展」が開催されていて、中央アメリカのメソ・アメリカ文明、コロンビア、ペルーを中心に繁栄したアンデス文明などユニークで謎に満ちた様々な古代文明を紹介しています。古代アメリカ学会会員の吉井隆雄氏が「インカ・マヤ文明探訪紀行」と題して講演を行いました。

古代アメリカ学会は中南米の最新の研究を行う研究者の集まりを中心とした学会です。講演概要は以下の通りです。

中央・南アメリカでは、多数の世界遺産が登録されており、インカ、マヤ、アステカ文明に関しても、グアテマラ、メキシコ、ペルーなどの国々に多くの世界遺産が存在します。古代アンデス文明は今から約5,000年前、現在のペルー、エクアドルの海岸地帯に古代文化が栄えそしてスペイン人に滅ぼされたインカ文明まで続きました。インカ文明は15世紀中～16世紀中で南北が約4000km 面積が日本の約3倍、人口が約1000万人、一人の皇帝によって統合されていました。その古代文明からインカ文明までの特色は①文字を持たない。②鉄を製造しなかった。③金や銀の鑄造が発達していた。④大型家畜がいなかった。⑤車輪の原理を知らなかった等があります。



また、マヤ文明は中米のユカタン半島を中心に2000年にもわたって栄え続いた文明です。

小さな都市国家が合従連衡と興亡を繰り返し、統一されることはありませんでした。マヤの人々は高度な建築技術や暦、複雑で独特の絵文字を持つ一方、鉄器などの金属器や車輪、牛や馬などの大

型家畜を持っていません。アステカ文明は14世紀から16世紀に現在のメキシコ中央部に栄え、首都のテノチティラン(現在のメキシコシティ)は当時の世界有数の規模を誇る都市でした。人々は独自の絵文字を持ち、精密な天体観測を基につくられた暦を使用していました。



メソ・アメリカ文明の特徴として①青銅器や鉄器などの金属器を持たなかった②生贄の儀式が盛んであった。③車輪の原理は、利用しなかった。④どうもこの栽培のほかにラモンの木の実などが主食だった、焼畑農法や段々畑・湿地で農業を行った⑤数学を発達させた。⑥文字種が豊富なマヤ文字を使用し、持ち送り式アーチ工法など高度な建築技術を持っていた。⑦極めて正確な暦を持っていた等です。



また、なかなか行けないボリビアのモホス文明を視察したことにも触れました。モホス文明は学術的にはまだ認められていないところがありますが、生態系を利用した文明は今後の環境問題を考えた場合とても参考になると思われます。今後の新しい研究成果に期待したいとまとめられました。

(光記念館 竹内健二)

館・園紹介 No.146

飛騨高山まちの博物館

〒506-0844 高山市上一之町 75
TEL 0577-32-1205
FAX 0577-35-1970
<http://www.city.takayama.lg.jp/bunkazai/machihaku/index.html>

当館は、昭和27年以来多くの方に親しまれてきた「歴史民俗資料館 高山市郷土館」を拡充・改装し、平成23年4月11日に新装開館した博物館です。

平成21年1月に国の認定を受けた「高山市歴史的風致維持向上計画」に基づき、市民や観光客が気軽に利用し、城下町高山の歴史や文化に触れることにより、郷土愛の醸成と高山の歴史の実感につながる施設となるよう整備しました。



【建物】

当館は、江戸時代に一之町の町年寄を代々務めた矢嶋氏の屋敷跡と、そこに隣接する豪商・永田氏の屋敷跡に位置します。展示室や収蔵庫には両屋敷跡に残されていた江戸から明治頃の土蔵10棟を活用しています。

また、新築の管理棟・研修棟には資料閲覧室や研修室、特別展示室を設けました。研修室では地域の祭りの練習も行われ、伝統文化継承機能も担っています。

【展示】

当館には14の常設展示室と1つの特別展示室があります。常設展示室各部屋の展示テーマは次の通りです。

高山祭、高山の町家、飛騨の匠、城下町高山、金森氏六代、高山の歴史年表、伝統行事、美術、信仰、町人の暮らし、学問・文芸、大火と防災、伝統工芸、産業

常設展示室では各テーマに基づいて、高山の文化の奥行きを感じてもらえるよう展示をしています。じっくりと見学するには2時間程かかりますが、何度も来館される方も多く、高山の歴史・文化を学ぶ拠点施設として定着してきています。



【入りやすい施設を目指して】

当館の特徴の一つに、入館のしやすさがあります。開館時間は展示室は午前9時から午後7時まで、庭等は午前7時から午後9時までで、年数回の臨時休館を除き年中無休としています。館内は土蔵2階も含めて車椅子での見学が可能です。また、入館料は無料としました。

入口も3方向に設け、伝統的建造物群保存地区の町並みから当館を通過して東山の寺院群や高山城跡等へと周遊することも容易となりました。庭のベンチに座ってゆっくりとくつろぐ方も増えてきており、憩いの場となっています。雰囲気だけを味わいたい方にも、深い知識を得たい方にも満足いただける施設を目指し、今後も改善を続けていきたいと思っています。



【交通】JR高山駅より徒歩15分

【開館時間】展示室 午前9時～午後7時
庭園 午前7時～午後9時
(季節により変更する場合有り)

【休館日】無休(臨時休館有)

【入館料】無料

(飛騨高山まちの博物館 大石崇史)